

# 母親ことばに関する一考察 —インプットから相互作用へ—

横尾 信男\*, 井手 英津子\*\*

(平成6年9月30日受理)

## A Study on Motherese: Input and Interaction

Nobuo YOKOO\* and Etsuko IDE\*\*

(Received September 30, 1994)

### 1. 序論

母親ことば, または母親語は, 英語では近年, motherese と呼ばれているが, 以前は, mothers' speech, または, maternal speech と呼ばれることが多かった (Snow 1977, Ellis 1986)<sup>1)</sup>. 本稿では日本語における母親ことばはどのようなものかを, 子供へのインプット言語としての性格をはっきりさせながら, 母子の相互作用に焦点をおいて述べていく。

第一に, 母親はどんな言葉を子供にかけているのだろうか. 母親ことばの特徴はどんなものと言えるだろうか. 日本の母親ことばが, 外国の母親ことばと比べて顕著な点は, 何であろうか.

第二に, 母と父の話し方は, どのように違うであろうか. その現在の相違点と, 将来への動きについて論じてみたい。

母親自身は自分たちの言葉や父親の言葉について, どう考えているかに関する指針を得るため, 東京都内の保育園の44組の親にアンケートを依頼したところ, 1才から6才までの子をもつ26家族が応じてくれた. その結果を含めて議論したい. さらに, 母と子の会話のテープ録音の結果を踏まえ, 日本の母親会話の機能・特徴をまとめてみることにする。

### 2. 保育園での調査結果

前述の保育園で1990年に行った, 筆者の作成したアンケート (表1) による調査の結果は次のようになった. 人数は26人の母親中の人数である. ( ) 内は, 調査対

象の家庭の子供の年齢を表す.

#### (1) 母親語について

問い—子供に話しかける時に注意しているのは, どういうことですか.

##### 1) 音声の特徴 (phonetical features)

- ゆっくり話す (5人 (1才11カ月, 3才1カ月))
- わかりやすく話す (5才9カ月, 4才5カ月)
- きつい言い方にならないようにする (3才10カ月)
- はっきり話す (1才7カ月)
- 抑揚を付ける (1才7カ月)
- 正確な発音を子供に覚えさせるよう努力する (1才)
- 正しい発音を伝えるために一度言ったことを子供に復唱させる (1才11カ月)

##### 2) 統語特徴 (syntactic features)

- ～してちょうだい, ～して下さいと文の最後まで言う. (3才)
- 言葉使い (2才)
- 呼び捨てにせず, 愛称で呼ぶ (3才1カ月, 6才1カ月)
- 順序よく, 簡潔に話す (1才11カ月)
- こみいった文は使わない (5才)
- 短い文を使う (1才9カ月, 1才7カ月)

##### 3) 語彙の特徴 (lexical features)

- 敬語を使って子供にきかせる (5才, 3才)
- 難しい言語は使わない (4才9カ月)
- 赤ちゃん言葉は使わない (1才5カ月)
- 「早く, 早く」と言わない (4才8カ月)

\* 教養部英語第2研究室

\*\* 教養部非常勤講師第1講師室

表 1

◆おかあさまへのアンケート◆

子供の言語発達における母親の役割の調査をしています。  
すみませんが、下のアンケートにお答え下さい。

お宅のお子さんは第一子 \_\_\_\_\_ ぐみ。 \_\_\_\_\_ 才 \_\_\_\_\_ ヶ月 (男・女)  
第二子 \_\_\_\_\_ ぐみ。 \_\_\_\_\_ 才 \_\_\_\_\_ ヶ月 (男・女)

- あなたは、お子さんのことを何と呼びますか。  
第一子(1) \_\_\_\_\_ (名前) (2) \_\_\_\_\_ ちゃん (3)愛称(ニックネーム)  
(4)おいちゃん, おねえちゃん (5)特に呼ばない(ホラ・チョット) (6)その他 \_\_\_\_\_  
第二子(1) \_\_\_\_\_ (名前) (2) \_\_\_\_\_ ちゃん (3)愛称(ニックネーム)  
(4)おいちゃん, おねえちゃん (5)特に呼ばない(ホラ・チョット) (6)その他 \_\_\_\_\_
- お子さんは、自分のことをお母さんに何と言いますか (呼びますか)。  
第一子 \_\_\_\_\_ (は)  
第二子 \_\_\_\_\_ (は)
- あなたは、自分のことをお子さん達に何と言いますか (呼びますか)。  
\_\_\_\_\_ (は)
- お子さんは、あなたのことを何と呼びますか。  
第一子 \_\_\_\_\_  
第二子 \_\_\_\_\_
- お父さんとお母さんで、子供への話しかけの言葉が違う場合はありますか。  
どういう点が違うか具体的に書いて下さい。  
(例) 父は早口だが、母はゆっくり話しかける。
- 子供に話しかける時、特に注意なさっているのはどういうことですか。

- 「バカ」など否定的な言葉は使わない(3才)
- 4) 相互作用上の特徴 (interactional features)
- 子の発言の繰り返し・確認(2才7カ月)
  - 子が話す時は子の方に体を傾ける(5才10カ月)
  - 子の目の高さで話す 3人(2才7カ月, 1才7カ月, 3才9カ月)
  - 子の目を見て話す 4人(6才4カ月, 1才5カ月, 3才1カ月, 3才10カ月)
  - 表情を豊かに(1才7カ月)
  - 話す時間を増やす(3才9カ月)
  - 話す前にまず名前呼び掛ける(3才10カ月)
  - 必ず返事をする(5才10カ月)
  - あいづちをうつ, 言うことを最後まで聞く(6才1カ月)
  - 子の反応を見ながら話す(5才9カ月)
  - 子の気持ちを尊重(5才11カ月)
  - 子供が言おうとした時, 話を先取りしない(2才7カ月)
  - 挨拶などを言わない時は, 一緒に言おうという形で一応促す(2才)
  - 自分で考えて表現したり, その子らしい面白い言葉を使った時, 「すごいね, 面白いね。」と話題にする, 評価する(2才7カ月)
  - 兄弟の間で子供の年令差は無視する
  - 「大きいから, 小さいから」は言わない(3才, 6才)
  - 命令口調にならないよう, 誘い掛けるように(3才1カ月)
  - 怒る時は理由を言う(4才8カ月)
  - 子供が聞く準備ができてから話す(5才9カ月)
  - 子供が外で体験したことを, 楽しくありのままに話しかける雰囲気を作っておく(5才)
  - 特に注意していない 1人(6才2カ月)
  - 無解答 2人

(2) 父親語について

問い—お父さんとお母さんと, 子供への話しかけ方, 内容の違いはありますか. また, 父親語の特徴はなんですか.

1) 音調特徴

- ゆっくり(1才11カ月)
- 早口(5才)
- 無口(5才)

2) 音韻特徴

大声・明瞭(2才7カ月)

3) 統語特徴

命令文が多い 命令的(3才10カ月)

接触時間が少ないので, 母親よりかえって叱らない(3才9カ月)

4) 意味特徴

幼児語を使う(1才11カ月)

難しい単語を使う(5才)

方言で話す(5才1カ月, 3才6カ月)

5) 相互作用上の特徴

ゆっくり, 繰り返し(1才10カ月)

落ち着いて話す(1才5カ月, 6才4カ月)

3. 父親語と母親語

Gleason (1978) は母親語の特徴を5つに分類している<sup>2)</sup>. 第一に, 文全体の特徴としてピッチが高く, 文の25%は文末が上がり調子で, これは特に命令文に顕著であるという. 動詞の平均的な長さは大人・子供間で長く, 文の25%は2箇所ストレスをおく. 子供の言語的インプットの分析を促し, 相互関係を促進し, 支える役割を果たしている.

これに対し, 日本の保育園の母親たちはどうであろうか. 前章で示したように, 「子供たちに話しかける時に注意しているのはどういうことですか。」というアンケートの問いに対して, 「ゆっくり話す」「抑揚をつける」「わかり易く話す」という答えが多かった. 実際にはピッチが高く, ゆっくり話すように心がけていることもあろう.

第二に, 音声学的側面での特徴について. 保育園の母親達は, 「きつい語調の後は静かな語調で話す」「はっきり話す」「正しい発音を伝えるために, 一度言った事を子供に復唱させる」と言っている.

Gleason は, 音声上のインプットの特徴は, 子供の言語能力に基づいて修正されるように思われるので, インプットも子供の言語処理能力も両方とも大切であるという意見を紹介している. 又, 子供はいろいろな音を発し, baby talk register の中には, 大人にはない音があり, その中から自国語に適合する音のみがビクアッ

ブされ、残って育っていくという理論は誠に興味深い。

即ち、赤ん坊の話し言葉には様々な音韻がもともと存在し、その中でその赤ん坊の使う言葉の母音・子音のみが残ってくるということである。

第三に、統語的特徴について、「順序よく簡潔に話す」「こみ入った文は使わない」「短い文で」という答えは、Gleason の、母子会話は統語的にはあまり複雑ではないという記述と一致する。伊藤 (1990)<sup>3)</sup> は、「接統詞を含まない文が多く、含んだ文は20.9%しかない、又、複文は9.2%しかない」と記述しているが、それ故、単文の組み合わせ順序や、接統詞なしで話す要領が大切ということになろう。その他、「～してちょうだい。～して下さい」と、文末まで言う母もいた。

第四に、意味的特徴について、Ferguson (1977) は、幼児語には特別なボキャブラリーがあることを指摘しているが、アンケートでは、幼児語は努めて使わないという意見があった。

また、「私」というべき所に、「親属関係を表わす語」「三人称(固有名詞)」を使ったりする点は洋の東西を問わない。アンケートでも、自分のことを「おかあさん」と言う母が17人、「ママは」と言う母が6人、「わたしは」と言う母が1人という結果が出た。さらに、Broen (1972) は、ボキャブラリーのタイプ・トークンの比率 (type token ratio) が低いことを指摘している<sup>4)</sup>。

アンケートでは、「むずかしい言葉は使わない」「バカなど否定的な言葉は使わない」という意見があった。ある3才と6才の二人の子をもつ母親は、客が来た場合など意識的に敬語を子供の前で使い、「お客様が～なされたわよ。」というような表現を子供に聞かせるようにしていると答えている。

第五の相互作用的特徴においては、Gleason (1978) のまとめたところでは、(1)質問が多い (2)速度が遅い (3)繰り返しが多いなどである。Snow らは母親の繰り返しについて、次のような事柄を挙げている<sup>5)</sup>。

- 1) 言い換え
- 2) 正確な繰り返し
- 3) 部分的な繰り返し
- 4) 文の形を変える
- 5) 文を切って繰り返す

Gleason は、母親の繰り返しは、母親達が教育学的原理に固執して行うものではなく、子供への直接的な行動が引き金になっていると述べている。筆者も意志伝達

の目的で行われているものと思う。

調査では、多くの母親が「表情を豊かに話す」「子の気持ちを尊重する」「必ず返事をする」など、親子の情愛を重視した態度をみせている。日本人は話す時、相手の顔を直視してはいけないと言われた時代もあったが、現在では、自分の子に対しては、「子の目を見て話す」と答えた者が4人いた。目線合わせ (eye contact) によって、母と子の信頼を確かめ合うことは、将来の人間同士の信頼の第一歩であると言えよう。また、「子供の発言内容をほめ、父母で論評し合う」「誘うように話す」「挨拶などと言わない時は、一緒に言おうという形で、一応促す」というのがあった。「おかたづけするのだあれ?」という間接表現を、「おかたづけしなさい」の代わりに言うこともある。

相互作用に関する解答が14も集まったことは、日本の母親には相互作用面に心を配る母親が多いことを感じさせる。

では、以上見てきた母親語と父親語の違いはどんな点であろうか。調査では、母親達にその違いを具体的に書いてくれるように依頼した。それをまとめると表2のようになる。

筆者の家庭での録音の一部を聞くと、5才の娘に対して、

父「おーい恵、パン屋に買い物に行くぞ。」 子「やーだ。」

父「早く自分の(子供の)靴を出せ。」 子「……………」

父「お、行くぞ。」

と、命令の表現が多く、自分のペースで会話を進めている父親は、子供と接する時間が短い場合には、子供の言語能力を把握できず、それを越えた文を話すことがあり、或いは子供を客観的にみる余裕があるためか、ユーモアを交えた発話も多い。

英語の場合は、父親語について Gleason (1978) は、次のように述べている<sup>6)</sup>。「① 平均的発話の長さは、子供に無関係に長かったり、複雑なことを言ったりする。② 命令文・脅しの文が多い。③ 同一語の多用が少ない。④ 家庭関連・役割関連の語が多い。⑤ 付加疑問文が少ない。⑥ WH で始まる疑問文が多い。⑦ 文構造などを平易なものにすること (down shift) が少ない」などである。

将来は、母親語と父親語の差異は少なくなっていくと思われる。その理由は、(1)母親の就業率上昇に伴う父母

表 2

	母 親 語	父 親 語	
速 度	ピッチが遅い。	落ち着いて話す。 早口（個人差あり）	
音声上の修正	ボンボン、オメメ など多数。	大声，明瞭。 方言で話す人もいる。 ふざけて幼児語を使う。 子供はもっと優しい声でと言う。	
繰 り 返 し	繰り返しがかなり 多い。	繰り返しがやや多い。	
統語構造を 変えて話す	非常に多い。	統語面より、むしろ子との接触 時間が短いため、子の言語能力 を正確に把握できず、子供にと っては難しい語を用いる。	
命 令 文 質 問 文	命令文が多い。 質問文は特に多い。	命令文は母親より多い。 語調は命令調である。	
子供の言葉の 拡張	多い。	特に指摘なし。	父親のボキャブ ラリーが不足。
統語的簡潔化	多い。		その他、口数が 少ない。

間の子育て分担の平均化による、父親の幼児語への知識増加 (2)現代の男言葉、女言葉の接近による、保育園での保父の発話が印象的であるが、父親ことばが母親ことばに接近していくのではないか、これは、女性っぽい話し方になるという意味ではなく、速度、繰り返し、統語構造の面などで、母親語に類似してくるという意味である。

父親語が子供に新しい刺激を与えていき、子供は状況

に敏感で少々難しい父親の言葉も消化していき、母親からは得られることのない栄養を父から得ているということは、伊藤 (1986) の論を待つまでもないであろう。

#### 4. 母親ことばの統括的な特徴

Clark&Clark (1977) によれば、母親は子供に3種類のレッスンをやっているという<sup>1)</sup>。

1) Conversational Lessons—母親は会話を持続さ

せるために、注意を喚起したり、質問したりして、子供の発言を発展させる。

2) Mapping Lessons—子供が話の筋道を広げる手助けをする。

3) Segmental Lessons—語・句・節を識別する手掛かりを与える。

これらは、子供に言葉を与えるためだけでなく、子供とコミュニケーションするためであると、R. Ellis (1986) は言う<sup>9)</sup>。

子供は早い段階で挨拶を教えられる。鈴木 (1975) は

挨拶を表3のように分類している<sup>9)</sup>。○は該当するものが存在することを表わす。

表3において、母親達が意図的に教えるものは④、⑤の部分であろう。

Gleason は、母親は挨拶を含んだ、いわゆる決まり文句を教え込もうとしており、幼児は決まり文句を全体的に習得し、それから、それを分析し、創造的に構成要素を統合する能力への発展させると述べているが、分析が行われているかどうかは未知である。確かに中間言語・中間文法というのは存在するであろうと思う。

表 3

機能 \ 型式	I	II	III
直 話 的	○	④	○
叙 述 的		⑤	○
詩 的 ・ 創 造 的			○
実 例	ヤーヤー	おはよう さよなら	祝詞 スピーチ

一般的に言えば、母親ことばは子の発話行為を助ける役目を果たす。Hudson (1980) は、「一発話行為は一社会的相互行為の一部として使われた一片の言葉であって、言語学者や哲学者の用いる文脈文法とは対照的なものである」と述べている。Hudson によると、Austin (1962) が導入した重要なものの一つは、彼のいう発話内の力と発語媒介の力の区別である<sup>10)</sup>。前者は、それら本来の性質、後者は、その効果に応じて分類する一般的傾向である。即ち、前者では“He' ll soon be leaving.”を聞き、聞き手がその知らせに喜ぶとか、彼が実際にまもなくたつことを信じていた場合は約束と考えることもできる。後者は意図されたものにしろ事実にしる、発話行為の結果に拘わるものである。“He' ll soon be leaving.”で意図される発語媒介の力は、聞き手を喜ばすことにあるかもしれないとの記述がある。

Ferguson (1977) は、母親ことばの機能として次の3つの事項を挙げている。(1)意志伝達の助け (2)言語学

習の助け (3)社会的機能である。さらに、Brown (1973) は、母親語の動機について、「同じ話題について二者を結びつけるため、コミュニケーションを行い、理解し、相手に理解させるため」と述べている。そして、母親が実際言葉を教えるとすれば、その家族の文化の中へ子供を社会化させていくことになる。

では実際、日本の一家庭での母と子の相互作用はどのように行われているであろうか。筆者の家庭でとったテープをもとにその様子を調べ、日本の母親ことばの特徴として、次にまとめてみよう。女の子は5才である。

(1) 母子一体

母「めぐちゃん、きょうは寒いから(あなたが)赤いジャンパー来ていくから。」 子「わかった。」

(2) 間接表現

母「めぐちゃん、もう(ねる)時間よ。」 子「ん。」  
母「ほら、もう眠たくなってきたでしょ。」

(3) 文末強調表現

母「また部屋を散らかしてばっかりいて、こんなに散らかしたら片付けるのが大変なばっかりよ。」

子「ばっかし言うな。」

(子供にとって文末・文尾が知覚的に顕著だということが分かる。これは(4)の例にも言える。)

(4) 終助詞の多用

母「来週の土曜日、図書館に行きましようか。」

子「うん。」

母「図書館に行きましようねー。」 子「ねー。」

母「そうしましようねー。」 子「ねー。」

(5) 曖昧な表現

母「めぐみちゃん。」 子「なに？」 母「ちょっと(来て)。」

(6) グループ志向

母「今度の遠足、お母さん達ついて行くのかな。」

子「わかんない。」 母「ゆきえちゃんのお母さん、来るのかな。」

子「知らない。」 母「ゆきえちゃんのお母さん来るなら、ママも行くのかな。」 子「……………」

母「めぐみちゃんはママに来てほしい？」

子「ほしい。」 (以上)

その状況において、コミュニケーションを正しく行うための単純化・省略・言い換えなどが行われている。こうして、実際に文字にしてみると(6)のように、格助詞の省略が多いことに気づく。Gleasonが英語の場合には、内容語(content word)に二重強勢(double primary stress)が置かれると述べているが、それに対応し、日本語の場合は二重強勢を置くわけにはいかないもので、内容語以外の言葉である助詞が脱落するのであろう。

これらは又日本語自体の特徴にも起因している。日本語は人間関係を円滑にするため、曖昧な表現がわざと好まれるが、この点も母親語に反映されている。

P. Clancy (1986)は、協調訓練(conformity training)や否定表現(saying no)について詳説している。そして、リサーチの結果として、日本のコミュニケーション・スタイルの一致性・協調性・グループ志向などは、非常に小さい時から母親ことばの中にみられるとしている<sup>13)</sup>。

Gleason (1973)が指摘したように、母子の相互作用は社会化の重要な部分になっている<sup>12)</sup>。

母親ことばについて、Newport, Gleitman (1977)のように、効果的な点と効果のない点、両方を認めた論

文もある。伝達スタイルについての個人的な相違は、複雑な言語表現の学習に影響を与えていると認めた上で、母親自身の繰り返しなどは、子供の発達について、負の相関関係をもっているという<sup>13)</sup>。繰り返しは母親の自己満足的な面が多く、子供には倦怠感を残すということか。彼らは、子供が言語情報を獲得していくということを狭義で処理される方法や前提でみるべきではないと言っている。

幼児は母親のみならず、父親・兄弟姉妹・祖父母・その他の親類・近隣の人々・幼稚園、保育園の人々・友達・視聴覚メディア、その他様々な言語環境より言葉を習得していくわけだが、なお、母親ことばの強い影響は否めない。感覚運動段階での母子相互作用は、大きな力をもつ幼少期の母子の触れ合いの中で誠に大切で、子供が言葉の規則を自己訂正・反復により、自分で習得していくのを見守ってやらねばならないのである。

岩淵ほか(1968)では、「従来の研究では、親が指導するか放任するかは、たいして影響がないと考えられていたが、親の指導力・家庭の状況という学習条件が、子供の言葉の習得能率の差となって表れるもののようなことが、4人の子供の5年間の調査より非常によくわかった」<sup>14)</sup>との記述がある。

## 5. 結論

これまで述べてきたことにより、母親ことばというものは、子供へのインプット言語として重要な役割を果たしていることが分かった。適切なインプットがあつてこそ、子供は自らの言語能力を正確に作動させ、正しいアウトプットを生み出すことができる。

前言語段階から継続されている母子の相互作用の意味は大きい。周囲の人々の母親への精神的・物質的支えが、母親からの作用にも影響を及ぼす。幼児を取り巻く言語環境の一つとして、周囲の者は直接的に相互作用に関係しているだけでなく、母親を通じて間接的に関与していることも忘れるべきでなからう。望ましい相互作用を行える環境の整備を検討することが望ましい。

これからの研究課題としては、次のことが挙げられる。(1)効果的な母親ことばのあり方を考えてみたい。(2)テレビ・ラジオなど視聴覚メディアの母親ことば、母子相互作用への影響を考えてみたい。特に最近の幼児は、一日に平均2時間以上テレビを見ていると報じられているが、それらは母子相互作用になんら関係していないのだろうか

か。(3)言語環境の一つである母親ことばが、第一言語の習得順序をどのように変えるかということは、非常に興味のある問題である。

ABSTRACT

Motherese, mothers' speech to her children, has various characteristics which are useful in learning the language between the mother and the child.

The following five features of the motherese were deduced by the questionnaire that Ide performed in a nursery school in Tokyo. First, as phonetical features, mothers try to tune the pitch and intonation to the sensitivity of the child. Second, as syntactic features, complicated sentences are avoided, and short sentences are often used. Third, as lexical features, difficult words and negative words are not used. Words of respect are demonstrated to children by a Japanese mother. Fourth, as interactional features, paraphrase and repetition of words are pointed out. Greeting and answers to children's questions are stressed as important. Respect for children's feelings is also referred in the questionnaire.

Motherese does not only serve to teach language, but also to socialize the child into the culture of the parent. The conversation recorded in the author's home disclosed conformity training to the Japanese society through the teaching of the agreement of opinions and ambiguous or indirect expressions.

In the linguistic environment of language acquisition, motherese has as great a role as other media and speech surrounding the child. It is very important for children in the sensorimotor stage to acquire the rules of the language through the input by their mothers and their reciprocal interactions which may facilitate their self corrections and repetitions.

注

1. Snow, C. E. & Ferguson, C. A. (eds.), (1977) *Talking to Children : Language Input and*

*Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press, P. 31

Ellis, R. (1986) *Understanding Second Language Acquisition*, Oxford, Oxford University Press, P. 300

2. Gleason, J. B. and Weintraub, S. (1978) "Input language and the acquisition of communicative competence" in K. Nelson (ed.) *Children's Language Vol.1*, New York, Gardner Press pp. 184-190

3. 伊藤克敏 (1990) 「こどものことば」 勁草書房 pp. 147-148

4. Gleason, J. B. and Weintraub, S. (1978) "Input language and the acquisition of communicative competence" in K. Nelson (ed.) *Children's Language Vol.1*, New York, Gardner Press, p. 187

タイプ・トークンの比率とは、あるサンプルの全語数の中の異なった語の占める割合のことである。

5. Cross, T. G. (1977) "Mothers' speech adjustments: the contribution of selected child listener variables" in C. E. Snow and C. A. Ferguson (eds.) *Talking to Children : Language Input and Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press, p. 184

6. Gleason, J. B. and Weintraub, S. (1978) "Input language and the acquisition of communicative competence" in K. Nelson (ed.) *Children's Language Vol.1*, New York, Gardner Press, pp. 192-196

7. Clark, H. & Clark, E. (1977) *Psychology and Language : An Introduction to Psycholinguistics*, New York, Harcourt Brace Jovanovich, Inc. pp. 327-328

8. Ellis, R. (1986) *Understanding Second Language Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press, p. 132

9. 鈴木孝夫 (1975) 『ことばと社会』 中公叢書 pp. 74-78

10. Hudson, R. A. (1980) *Sociolinguistics*, London, Cambridge University Press, pp. 110-111

11. Clancy, P. (1986) "The acquisition of commu-



- nicative style in Japanese" in B. B. Schieffelin & E. Ochs (eds.) *Language Socialization across Cultures*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 235-245
12. Gleason, J. B. (1973) "Code switching in children's language" in T. E. Moore (ed.) *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, New York, Academic Press, pp. 160-163
13. Newport, E. L., Gleitman, H. and Gleitman, L. R. (1977) "Mother, I'd rather do it myself ; some effects and non-effects of maternal speech style" in C. E. Snow and C. A. Ferguson (eds.) *Talking to Children : Language Input Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 119-144
14. 岩淵悦太郎 et al. (1968) 『ことばの誕生』 日本放送協会 pp. 268-269
- Ellis, R. (1986) *Understanding Second Language Acquisition*, Oxford, Oxford University Press
- Ferguson, C. A. (1977) "Baby talk as a simplified register" in C. E. Snow & C. A. Ferguson (1977) (eds.) *Talking to Children : Language Input and Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 219-236
- Gleason, J. B. (1973) "Code switching in children's language" in T. Moore (ed.) *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, New York, Academic Press
- , (1975) "Fathers and other strangers : men's speech to young children" in D. P. Dato (ed.) *Georgetown University Round Table on Language and Linguistics 1975*, Washington, D.C. Georgetown University
- , (1977) "Talking to children : some notes on feedback" in C.E. Snow and C.A. Ferguson (eds.) *Talking to Children : Language Input and Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press pp. 199-205
- Gleason, J.B. and Weintraub, S. (1978) "Input language and the acquisition of communicative competence" in K. Nelson (ed.) *Children's Language, Vol. 1*, New York, Gardner Press
- Hudson, R.A. (1980) *Sociolinguistics*, London, Cambridge University Press
- 伊藤克敏 (1982) 「幼児言語研究の新段階」 『言語』 大修館書店 Vol. 11, No. 1, pp. 94-102
- , (1982) 「幼児言語学の動向-認知とことばの発達を中心に」 『言語』 大修館書店 Vol. 11, No. 9 pp. 52-60
- , (1986) 『ことばと人間』 三省堂
- , (1990) 『こどものことば』 勁草書房
- 岩淵悦太郎 et al. (1968) 『ことばの誕生』 日本放送協会
- Kessel, F.S. and Siegel, A.W. (1983) *The Child and Other Cultural Inventions*, New York, Praeger Publishers
- Lyons, J. (1981) *Language and Linguistics : An Introduction*, Cambridge, Cambridge University Press

参考文献

荒井良 (1982) 『脳と言葉』 社会思想社

Bower, T. G. R. (1978) *Human Development*, San Francisco, W. H. Freeman & Co.

Brown, R. (1973) *A First Language, The Early Stage*, Cambridge, Mass. Harvard University Press

Brumfit, C. (1984) *Communicative Methodology in Language Teaching*, Cambridge, Cambridge University Press

Clancy, P. (1986) "The acquisition of communicative style in Japanese" in B. B. Schieffelin & E. Ochs (eds.) *Language Socialization across Cultures*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 213-250

Clark, H. & Clark, E. (1977) *Psychology and Language : An Introduction to Psycholinguistics*, Harcourt Brace Jovanovich, Inc. New York

Cross, T.G. (1977) "Mothers' speech adjustments : the contribution of selected child listener variables" in C.E. Snow and C.A. Ferguson (eds.) *Talking to Children : Language Input and Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 151-188

- McNeill, D. (1987) *Psycholinguistics : A New Approach*, New York, Harper and Row Publishers
- Newport, E.L., Gleitman, H. & Gleitman, L.R. (1977) "Mother, I'd rather do it myself ; some effects and non-effects of maternal speech style" in C.E. Snow and C.A. Ferguson (eds.) *Talking to Children : Language Input and Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 109-149
- Piattelli-Palmarini, M. (1980) *Language and Learning : The Debate between Jean Piaget and Noam Chomsky*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press
- Radgon, M.M. (1976) *Single Word Usage, Cognitive Development, and the Beginning of Combined Speech*, Cambridge, Cambridge University Press
- Schieffelin, B.B. & Ochs, E. (eds.), (1986) *Language Socialization across Cultures*, New York, Cambridge University Press
- Slobin, D.I. (1979) *Psycholinguistics*, Glenview, Illinois, Scott Fireman & Co.
- Snow, C.E. & Ferguson, C.A. (eds.), (1977) *Talking to Children : Language Input and Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press
- 鈴木孝夫 (1975) 『ことばと社会』 中公叢書
- Vygotsky, L.S. (1962) *Thoughts and Language*, Cambridge, Mass., MIT Press
- Weeks, T.E. (1979) *Born to Talk*, Rowley, Mass., MIT Press